

報道関係者 各位

2022年4月1日
公益財団法人日本デザイン振興会

「2022年度グッドデザイン賞」応募を4月1日(金)より受付開始 **あらゆるジャンルのデザインが応募対象、5月25日(水)応募締め切り**



公益財団法人日本デザイン振興会(会長：内藤廣、所在地：東京都港区)は、主催事業である2022年度グッドデザイン賞の応募受け付けを4月1日(金)から開始します。応募はグッドデザイン賞のウェブサイト(www.g-mark.org)で受け付け、締め切りは5月25日(水)です。グッドデザイン賞は1957年から続く日本を代表する世界的なデザイン賞として、シンボルマークの「Gマーク」を通じて広く知られています。グッドデザイン賞を受賞したデザインは、良いデザインとして多くのユーザーやプロフェッショナルたちから信頼されるとともに、受賞者のイメージやブランド力を高めることにも貢献しています。



参考/2021年度グッドデザイン大賞
遠隔勤務来店が可能な「分身ロボットカフェ
DAWN ver.β」と分身ロボットOriHime

審査テーマは「交意と交響」、審査委員長は安次富隆氏が継続就任

2022年度の審査委員長・副委員長は、前年に続いて安次富隆氏(プロダクトデザイナー/ザートデザイン取締役社長)と、齋藤精一氏(クリエイティブディレクター/パノラマティクス主宰)が務めます。本年度の審査テーマは「交意と交響」で、人々が持つ「創造する意志」を積極的に交わせ、そうした人々のアクションが互いに関係し影響し合うことで生み出されるデザインに注目してまいります。

応募対象と応募の条件

応募対象：商品・建築・アプリケーション・ソフトウェア・コンテンツ・サービス・システム・デザインを活用したプロジェクトや活動など。国内外、一般用/業務用は問わない。

- ・2022年10月7日(金)の受賞発表日に公表が可能なこと。
- ・2023年3月31日(金)までにユーザーが購入または利用が可能なこと。

応募資格：応募対象の事業主体者、およびデザイン事業者。

応募費用：審査費、出展費など段階に応じた費用が発生。

応募方法：グッドデザイン賞ウェブサイト(www.g-mark.org)の応募専用ページで必要事項を5月25日(水)までに登録。

今後の主なスケジュール

4月1日(金)～5月25日(水)：応募受付期間

10月7日(金)：受賞発表 [グッドデザイン賞、グッドデザイン・ベスト100、グッドフォーカス賞、グッドデザイン金賞、ファイナリスト (大賞候補)、ロングライフデザイン賞]

11月1日(火)：受賞祝賀会、大賞選出会、グッドデザイン大賞発表

賞の種類と受賞プロモーション

全ての応募対象に対して審査が実施され「グッドデザイン賞」が選出されます。その中で特に優れた100件は「グッドデザイン・ベスト100」とされます。このグッドデザイン・ベスト100の中から「グッドデザイン金賞」「グッドフォーカス賞」が選ばれ、「グッドデザイン金賞」の中からさらに「グッドデザイン大賞候補 (ファイナリスト)」を選出。最高賞である「グッドデザイン大賞」はグッドデザイン大賞候補の中から1件が決定します。



受賞デザインは、公式ウェブサイトで紹介するほか、国内外での展示会や見本市、販売イベントなどでも紹介を行います。「ベスト100」に選ばれたデザインは、10月7日(金)から東京ミッドタウンで開催するグッドデザイン賞受賞展で展示し、広く紹介されます。

参考/2021年度開催の「グッドデザイン・ベスト100」展示



主催・後援

- ・主催：公益財団法人日本デザイン振興会
- ・後援：経済産業省、中小企業庁、東京都、日本商工会議所、日本貿易振興機構(JETRO)、国際機関日本アセアンセンター、日本経済新聞社、World Design Organization

グッドデザイン・ロングライフデザイン賞への応募受付も4月1日(金)より開始

長年にわたり人々から支持され将来にわたり価値を発揮するスタンダード・デザインに贈られる「グッドデザイン・ロングライフデザイン賞」の応募も、4月1日(金)から受け付けを開始します。企業やデザイナーによる応募のほか、商品のユーザーなどからの一般推薦も可能です。

*本リリースに記載のスケジュール、名称などは今後変更される場合があります。



参考：グッドデザイン賞について

公益財団法人日本デザイン振興会が主催するデザインの評価とプロモーションのための事業です。製品、建築、ソフトウェア、システム、サービスなど、私たちを取りまくさまざまなものごとに贈られます。かたちのある無しにかかわらず、人が何らかの理想や目的を果たすために築いたものごとをデザインととらえ、その質を評価・顕彰しています。毎年開催され、これまでに約50,000件以上のグッドデザインが選ばれています。

参考資料：

2022年度グッドデザイン賞 審査委員長・審査副委員長メッセージ

審査委員長：安次富 隆



プロダクトデザイナー
有限会社ザートデザイン 取締役社長

ソニー株式会社デザインセンターを経て、1991年に有限会社ザートデザインを設立。2008年より多摩美術大学生産デザイン学科プロダクトデザイン教授。情報機器や家電製品などのエレクトロニクス商品のデザイン開発、地場産業開発、デザイン教育などの総合的なデザインアプローチを行っている。

「交意と交響」

いま、誰もが様々な不安を感じている中で、人々の希求に耳を澄まして、それに応えようと動く人たちがいます。そのような人たちどうしが積極的に呼応し、交わり動く中から生み出されるデザインは、何かをより良くしたい、人の気持ちに応えたいという、創造する意志に支えられています。この創意こそがデザインの原動力であり、社会の様々な場面でデザインの力が発揮されることが強く求められるようになってきています。

私たちが抱えている課題は、これまで以上に多様化、複雑化しています。これらの課題を解決して心地よい社会にしていけるよう、分野や領域を超えて「意の力」を交えて行かなければならないでしょう。

デザインは私たちの身の回りのあらゆるところに存在しています。それらはお互いに関係し合い、影響し合ってこの社会をかたち作っています。ひとつひとつのデザインが持っている力と、それぞれのデザインを担った人々の意志とを交わらせて、さらに響き渡らせていくことが大切なのではないのでしょうか。

そうしてもたらされる動的な状態は、一致や均衡が取れた状態ではないかもしれないし、時には不協和音が生じることがあるかもしれません。しかし望ましい調和を目指して、交響しながら構築されていくプロセスにこそ意義があると思います。私たちにとって望ましい交響の状態を見すえながら、新しいデザインの取り組みがさらに生まれてきているのです。

グッドデザイン賞は、あらゆるデザインの営みが一堂に会する場です。社会に存在する無数のデザインを意識し、それらの関係性をもたらす成果や可能性を読み解き、示すことがグッドデザイン賞の大きな役割であると考えています。

2022年度のグッドデザイン賞で、新しいデザインに出会えること、新しい響き合いがもたらされることを楽しみにしています。

安次富 隆

審査副委員長：齋藤 精一



クリエイティブディレクター
パノラマティクス主宰

コロンビア大学建築学科で建築デザインを学び、2000年からニューヨークで活動を開始。その後、フリーランスのクリエイターとして活躍後、2006年にライゾマティクス（現：株式会社アブストラクトエンジン）を設立。現在では行政や企業などの企画や実装のアドバイスも数多く行う。

「交意と交響」

2021年度はグッドデザイン賞を通じてたくさんの「交動と希求」に出会うことができました。デザインの力を今まで以上に多くの方が希求し、交動したことで、生活を、社会を、価値観を変えるデザインが数多く生み出され、それらが今後社会に引き続き、深く、広く、実装されていくことを強く期待させるように思いました。「交わる」という姿勢が、さらに多くの分野に広がり、様々なところで人々が自分たちと違った価値観や技術との交わりを模索しているうねりも感じることができました。

モノやコトを創り、社会に発し続けている私たちデザインに携わる者にとって、無力感や悔しい思いをする出来事が現在進行系で次々に起きています。生活様式の変化や価値の多様化をはじめ、情報の取捨選択の必要性、デジタル化の力、データを収集・分析することの重要性、ものごとのプロセスの透明化など、社会とデザインが向き合うように求められていることの領域が広がり、それが高速で変化するいま、社会を支えるシステムや産業はそのスピードについていけているのでしょうか？これまで使い続けてきたブラックボックス化された技術やプロセスが、いまあるべき社会の進化を遅くしてはいないのでしょうか？デザインという同じレンズで社会を様々な方向から見るができる私たちが、形態や質量、素材や単位、コードやプログラムなどの違いを超えて、お互いの創造する「意」を交わすことによって、今まで諦めていた仕組みや製品や活動ができる可能性がまだまだあると思います。企業や団体だけではなく、何かを創る個人の「意」が交わり響き合うことで、様々なことがデザインの力を得て、さらに進化できると信じています。

グッドデザインは広がり続けています。私たち審査委員もそこに集うデザインの数々に共通点や繋ぐべきアイデアを見つけ、それらをフォーカス・イシューをはじめとする取り組みを通じて発信できるように議論を重ねていきます。様々なデザインをマクロに見通せる機会でもあるグッドデザイン賞を通して、日本だけではなく世界全体の社会や生活がより良くなるヒントを見つけて発信していきます。

今年も、交わりに溢れたこれからの羅針盤になるようなデザインに出会えることを楽しみにしています。

齋藤 精一